

【 4 】

氏名	田中 英三 たなか えいぞう
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第106号
学位授与の日付	昭和51年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ライプニッツ的世界の宗教哲学

論文調査委員 (主査) 教授 武内義範 教授 武藤一雄 教授 辻村公一

論文内容の要旨

本論文はライプニッツの実体概念の根底に、世界を創造する神の意図と、それに人格的に対応する——被造物でありながら、しかも自由を有している——有限的理性精神との相関性をみとめ、このような宗教性を源泉として、そこから彼の形而上学全体を見直すことを試みたものである。よく知られている如く、ライプニッツは、神は最善の世界を創造し、その経綸をこの世界に行う、と考えている。その場合、神的悟性は世界の創造に際して、あらゆる可能な世界秩序の諸系列を考え、最大の多様性と豊かさをもつ唯一最善の世界を選定する。この神的悟性の商量のうちで、神はすべての可能的事物、すなわち事物の本質を、その完全性の程度に応じて考慮に入れる。事物の本質、すなわち可能性というライプニッツの規定は、神によって現実化を決定される以前に、すべての可能的事物が存在しようとする要求を、既にもっていることを意味している。然るに上述の如く、神の世界決定は、最善の世界に目標をおいているから、神はあらゆる可能性の系列のうちで最善のそれを求めて、比較計量する。その際、神の目には、事物の系列は、その初めと終りとは同時であるから、神は系列の全体を一挙に見通し、系列の中の一の事物を商量するときには、つねに他の事物をも顧みることとなる。ここに事物と事物との間の共可能性が神的配慮の中に成立する所以がある。この原理に従って、神が最善の系列を選ぶとき、その一々の系列の項は、完全性の程度に応じて存在に向わしめられる。

しかしこの段階の神的悟性の計量は、未だそれだけでは、世界創造を実現してはいない。神の自由な意志が、最善の原理にしたがって、しかも純粋に自己限定的に働くときに、世界ははじめて現実の世界として創造せられる。このように神的悟性を介して神的意志が働くのであり、それ故に神的知性は神的意志を傾けるだけで決定はしないといわれる。神における力を基底とする知性と意志のこの関係は、さらに神（無限的理性精神）と人間（有限的理性精神）との関係のうちにも映し出される。すなわちここでも神は有限的理性精神を、強制しないで傾かせるのである。

以上の考察によって、ライプニッツ解釈の一つの新しい地平が開かれる。共可能性は世界を最善の全体

へ普遍化するとともに、その系列の全体を背景として荷う一々の個物に存在する理由を充足せしめる（充足理由の原理）。世界と個物とは、ともに相互に補足しあい、世界は個物に個物として在りうる場所を開くとともにいずれの個物も世界が世界であるための不可欠な要素となる。さらに個物の表出作用に於ても、個物相互の關係に、共可能性が働いている。それ故、それぞれの個物は、それぞれの視点から独自の仕方 で世界を映している小宇宙であり、しかもそれらの裡に映された世界の像の間に、相互に一對一の対応關係が成立するのである。こうして共可能性の概念から、田中氏はライプニッツにおける実体の論理を展開し個性の深い意味を追求する。

ライプニッツにおけるオプティミズムをひとは軽々に論じ、これに批判の言辞を浴せかける。しかし田中氏によれば、ライプニッツのオプティミズムは、直接的な世界の事実として受け取らるべきものではなく、その背後に、それぞれ存在することを要求する、もろもろの個物の可能的本質間の、ほとんど鬭争的ともいべき競合關係を前提している。そうであるならばこのような世界に存在しうするためには、それぞれの個物は、なにかづく有限的理性存在としての人間は、何よりもまず混雑した曖昧な表象や思想に由来する欲望的な自己を否定して、宇宙を映じうる鏡に自己を磨き上げねばならない。ライプニッツのオプティミズムは、田中氏によれば、ペシミズムの彼岸にある。罪をプリバシオンとするライプニッツの見解にも、多くの否定的な評価が付きまわっている。しかし罪と悪とを、究極的に積極的な原理として打ち立てるとするならば、それからの離脱とか救済は、結局は不可能とならざるを得ないであろう。

論文審査の結果の要旨

ライプニッツの哲学は、多面的な性格を有しているために、様々な解釈が行われている。たとえばB・ラッセルのように、ライプニッツの数理哲学・自然哲学・論理学の部門における卓越性を賞讃しながらも、その道徳・宗教論については、これを無意味なものとして否定する学者もあれば、逆に彼の哲学を主として宗教的心性や神的直観に基づくものとして解釈しようとする学者も、現代に至るまで少数ながら絶えず現れている。本論文の特色は、一方ではライプニッツ哲学の宗教的性格を重んじて終始彼の思索を貫く心情の響きのようなものを聞き逃さないように努力したことである。しかしそれとともに、またライプニッツ哲学の形而上学的本質や論理的整合性にも十分な注意を払い、つねに前者にもとづいて後者を解明しようとしたことである。とくにこのような立場からライプニッツ哲学の「本質」とか「可能性」についての概念を詳細に検討して、そこから「共可能性」の問題に分析をすすめて、共可能性の概念に含まれているいろいろの側面を、明瞭ならしめた点は、十分に評価される。

共可能性の概念と、傾導性を原理とする神と人間との人格的呼応關係とを、両軸にして展開している本論文の中心の部分は、ライプニッツの思想の難解な問題（たとえば、单子論に於ける実体論、充足理由の原理、予定調和、実体的紐帯など）に、解明の新しい手がかりを与えるものと考えられる。田中氏もライプニッツの実体論や充足理由の原理が齎らした哲学史上の新しい局面に注意をむけて、その把握に努めているが、後の予定調和、実体的紐帯の問題には未だ充分の解答を示していない。この点に関しては今後の努力にまつものである。終りの方で論じられている「神の自由と人間の自由」、「悪の問題」を扱っている章では、田中氏がライプニッツの宗教的経験の核心と考えているものを結論的な形で示している。

本論は論義が多岐にわたるために、一貫した論旨がややもすると見落されがちであって、またレトリックにすぎた文章がかえって筋道を見失わせ、問題の核心を把握するのに困難を感じしめる。これらの点はよりの確な表現に改めることが望ましい。

本論文は田中氏の多年にわたるライブニッツ研究の成果であり、いたるところに著者独自の創見にもとづく解釈がみられるが、なかんづく、ライブニッツのオプティミズムなるものが尋常一様のものでなく、深くペシミズムを踏まえたものであるという理解には特に傾聴すべきである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。